

パリへ行った妻と娘

近藤紘一



パリへ行った 妻と娘

近藤紘一

文藝春秋

著者略歴

1940（昭和15）年東京生まれ。63年早稲田大学文学部仏文科卒業。サンケイ新聞社入社。静岡支局を経て、67～69年フランス留学。71～75年サイゴン特派員、78～83年バンコク特派員。現在国際報道部次長。79年「サイゴンから来た妻と娘」で第10回大宅壮一ノンフィクション賞、80年国際報道で上田博一国際記者賞、84年「仏陀を買う」で第10回中央公論新人賞を受賞。著書に「サイゴンのいちばん長い日」「サイゴンから来た妻と娘」「バンコクの妻と娘」「したたかな敗者たち」「戦火と混乱の日々」「国際報道の立場から」（共著）がある。

パリへ行った妻と娘

定価 1000円

1985年5月10日第1刷

著者 近藤 紘一

装幀者 平野甲賀

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 03-265-1211（代表）

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Kōichi Kondō 1985 Printed in Japan

石一落丁・乱丁の場合はお取替いたします

パリへ行った妻と娘

ソファ―に腰をかけて、誰かを待っている。

ホテルのロビーらしい。

暑い。そして明るい。

さつきから、両隣の人がしきりと肩をぶつけてくる。どうしてこんな無作法を働くのだろう。女性の声がした。

「ねえ……ねえったら——」

じれったそうに尖った口調だ。

「いいかげんにしてよ。起きてちょうだい」

目の前に妻の顔があった。真上からおおいかぶさるようにして、私の両肩を揺すっている。

「……ん？」

壁の時計は十一時半をさしている。

五時前、夜勤から戻った。風呂に入り、冷蔵庫を引っかき回してハムやら果物やらを胃袋につ

め込み、床についたのはもう下の通りが活気づいてからである。

「……たのむよ……留守だ……いつも午前中は……」

「寝ぼけないでよ。電話じゃないの。ピエールが——」

ピエールがどうしたっていうんだ。せめてもう一時間……。

「とにかく起きてちょうだい。彼、何か話があるんですって」

毛布をはぎとられ、ついでに床に転がった枕で二、三回、頭をはたかれ、ようやく目を覚ました。

「話？ 何の話だ」

「知らないわ。もう二時間以上も坐り込んで待っているのよ」

ちよっとおかしそうに、だが半分は妙に真面目な飲み込み顔でいい、

「さあ、顔を洗って」

ふらつく足を洗面所に運び、蛇口の水を四、五回、顔にこすりつけた。そのままパジャマ姿でダイニング・キッチンに出ると、仕切りを取り払った六畳間の「サロン」の中央に、ピエールが正座している。

「オハヨゴザイマス」

カーペットに両手をついて深々と頭を下げた。

妻が用意してくれておいたコーヒーを一口すすり、カップを手にしたまま彼の正面にあぐらをかいだ。

「すみません。ママンに起こさないでくれ、と言ったんですが」

ママンとは妻のことだ。だいたい前から彼は私たちを「パパ」、「ママン」と呼ぶようになってる。

「いや、いいよ。でも、とりあえずこいつを一杯、片づけさせてくれ」

「ドウゾ」

おそろしくかしこまっている。度の強い眼鏡をかけた童顔を、真青に緊張させ、何か物音がしたらそのままひっくり返ってしまいそうなほどコチコチである。私のほうは、睡眠薬がもたらす棒のような眠りのかたまりがまだ頭の芯に残っている。なぜ相手がこんな硬直しているのか、さっぱり合点がいかない。

濃い、熱いのをゆっくり飲み終え、かたわらに突っ立っていた娘のユンにお代わりを言いつけた。
「どうした？ 何か話したいことがあるって？」

タバコに火をつけ、二、三服大きく吸い込んでから口を切ると、

「ウィ・ムシュー」

相手は、ほんのちよつとひるんだ。それから、突然、真赤になって、一気にしゃべりだした。大柄な肥満体に似合わず、小声で早口の青年である。それがすっかりうわずって超スピードで話すので、ろくに単語も聞きとれない。話の主題さえわからない。

「おい、おい、ちよつと待て」

二杯目のコーヒーで頭の霧を払った。

「もう一回、最初から頼む」

「ウィ・ムシュー」

相手はまた、赤くなったり青くなったりしながら、ペラペラとくり返しはじめた。

「ダメだ、ダメだ。もつとゆっくり話してくれよ」

三回目になって、ようやく、

「ブードレ・プロボゼ……（申し込みをいたしたく）」「ペルミシオン・デ・バラン……（両親の許可を）」

断片的な表現が耳に入った。それでも、まだ、即座には事の内容がわからない。

「おい、待て」

と、再び制し、

「何かい、つまり、君はいま結婚について話しているのか」

「ええ、そうです」

まだあがり切っているせいか、苛立ったり、拍子抜けしたりする余裕もないらしい。

「そうなんです。ぼく、結婚したいんです」

「なるほどね。そりゃ、結構だ」

「本当ですか？」

「本当ですか、って、そんなこと君自身の問題じゃないか。それで？ 相手は決まっているのか

ら？」

「ですから、ユンと、いや、お嬢さんです」

額に汗を浮かべ、近眼鏡の奥のトビ色の瞳をまっすぐ私の顔に据えて答えた。

「なんだって」

我ながら救い難い鈍さというほかない。相手の態度から、とつくに察してしかるべきことだった。夜勤ボケもここまでくると重態といってよからう。それにしても、まさかこう唐突に、真正面からこられるとは思ってもいなかった。

「うーん、ユンとか」

「そうです。彼女と結婚したい。許してくださいますか」

残っていた眠気が完全に吹き飛ばされた。

「おい、もう一杯コーヒーをよこせ」

柱に背をもたせて他人事ひとごとのように澄ましていた当の娘に命じ、もう一度、「うーん」と、唸うなった。

どうやら立場が逆転し、うっかりするところでは私のほうがしどろもどろになりかねない。妻は知らん顔で、私たちに背を向け、昼食の用意に取り組んでいる。ピエールはまだ何事かうだうだ続けている。どう見たところで、まったくの子供だ。多少落ち着きを取りもどしてから、

「なあ、ピエール、君は幾歳いくつだい」

「十九歳です」

「いったん答え、

「いえ、正確には十九・五歳です。あと六カ月で二十歳になります」

と、あわてて訂正した。昨年、大学に入学してコンピュータと取り組みはじめた。娘にいたっては、この春ようやくバカロレア（大学入学資格）を取得したばかりである。父親の勤務の関係で学歴が遅れ、年齢こそ二十三歳だが、親の目から見ればまだ中学生並みの小娘だ。こんな坊やと小娘が結婚して、いったいどうなるものか。

「まあ、原則的には君たちの勝手だがね」

とりあえず政治的応対で時間稼ぎをはかり、コーヒーを運んできた娘に、

「おい、お前のことなんだぜ。彼、お前と結婚したい、と言ってるぞ」

「知ってるよ。さっきから聞いてたもん」

ケロリと答えた。

ソファーに引きとめて、

「お前の気持ちはどうなんだ」

聞かずもがなのことをたずねた。ユンはピエールを完全制覇している。彼女の同意がなければ、この坊やが求婚など持ち出すはずはあるまい。

「本当に、お前、ピエールと結婚する気があるんだろうね。彼が好きなんだろうね」

ようやく妻が一座に加わり、持ち前の厳しい口調で娘にただした。母親を前にすると、ユンはいつもたちまち襟を正す。それまでヘラヘラしていた表情をひきしめ、しばらく求婚者と母親の顔に交互に目を走らせたうえで、小さくうなずいた。

「ええ、ぼくたち、二人でよく話し合つたんです。それで——」

ビエールが言いかけたのを、妻はさえぎり、

「あんたたちのことはわかつたわ。さっきパパが言つたように、トゥー・デパン・ド・ブー（すべてはあんたたちの気持ちしだい）。でも、あんたのご両親はどう考えていらつしやるの。この話はどうご存知なの？」

單刀直入にただした。

二年來、娘はパリ郊外の彼の家になつてゐる。彼の家、ルロワ一家とは、数年前、私がパンコクに赴任して間もなく知り合つた。一家が毎夏バカンスを過ごして逗留していた海浜のホテルにたまたま泊まり合わせたのがきっかけである。四年後、ユンが通つていたリセ（フランス学制の中等学校）の最高学年のクラスが、生徒不足で閉鎖になつた。校長の進言もあつてフランス本国のリセに送り込むことになつた。話を知つたルロワ家が二つ返事で娘を引き受けてくれた。

一家は、ルロワ氏夫妻、それにビエールとアンドレ兄弟の四大家族である。氣安く引き受けたものの男兄弟だけの中にいきなり女の子に、それも肌の色の違ひの飛び込まれ、夫妻もまごつき音を上げるのではないかと、当初私たちは危惧した。案に相違してユンの評判は上々だつた。

兄弟、とくに兄のビエールがこの年上の小娘に初対面のときから惹かれ——一つ屋根の下で暮らすようになってからますます症状亢進し少々手がつけられぬ段階に達してしまつたことも、大分以前からわかつていた。それでも結局のところは子供のはい、か程度であらう、と、私も妻も考えていた。

それがいきなり、こうして本人の口から大真面目の求婚である。完全に虚をつかれた。

いづれにしろ、妻が言うようにこの件に関しては何よりも夫妻の意向を尊重しなければならぬ。私たちが知るかぎり一家は、フランスの地方出身の家族の多くがそうであるように、きわめて常識的で着実に保守的な家風の持ち主である。場合によっては長男の将来の「嫁」についてもとくに候補者を決めているかもしれない。しかもユンはベトナム原産の東洋娘だ。一時的に預かる分にはさしつかえないかもしれないが、正式に一家のメンバーに登録するとなると、世間体やら何やらいろいろ問題がでてくるのではないか。

夫妻が長男の結婚についてどんな思惑を持っているか不明だが、もしこの突如舞い込んだ東洋娘がその思惑の邪魔立てをするようなことになったら、彼らの今までの親切に対してまったく申し訳が立たないことになる。

「わかるか、ピエール。オレたちはユンに対する君の気持ちをとても嬉しく思う。そして結婚というのは本人同士の意思を尊重するのが、いちばん理想的だと思う。ただどね、オレたちは君のご両親に対して恩知らずな真似だけは絶対にしたくないんだ。家内も言ったように、ご両親はどう考えておられるんだい。君は今度日本に来る前に、ご両親とこのことについて話し合ったのかしら」

「両親はぼくの気持ちを知っています。一応は話しましたけれど」

「うん。それで？」

「はっきりしたことは言いませんでした。でも、個人的には、ぼくは二人とも賛成だと確信して

います。父も母も、もうユンを本当に家族の一員のように考えているんです」

「でもな、それはあくまで君の個人的な確信だ。オレたちは、それだけじゃまだ安心できないよ」

「わかりました。もし両親が『ウィ』と言ったら、ぼくたちの結婚を許してくださいすか」

この頃になると、ビエールも落ち着きを取りもどし、思いがけぬほど大人びた口調で話した。

「その場合は、オレたちのほうは文句なくOKだ。ただし両親が乗り気でないのに君が言い張ってケンカなんかになった場合は、話が別だぜ」

「わかりました。メルシー・ボクー」

ビエールは頭を下げ、ユンのほうを見てニッコリ笑った。

昼食ははなやいだひとときとなった。緊張から解放されたビエールは、すでに首尾なれり、といったようである。しきりと隣席のユンを突ついたり、小声で二人だけの間の冗談を言ってクスクス笑ったりしている。

メニューはベトナム料理のゴイクンだった。エビ、ブタ、イカなどをゆで、別皿に生のモヤシ、シソの葉、キュウリの千切りなどを用意する。これらを、バンチャンで葉巻大にくるみ、ミソ味をきかせた特別のソースをつけて食べる。バンチャンは米の粉を重湯状にして薄くのばし、乾燥させた半透明の皮である。サイゴン（現ホーチミン市）のアメリカ人たちはライス・ペーパーと呼んでいた。使用するときには、束にかさねて濡れナプキンで包んだり、直接水滴をふりかけて柔らかくもどす。

ベトナム人は左手にこのバンチャンを広げ、その片隅に各種の具を乗せて実に器用に巻いていく。巻くさいに扇形をしたバンチャンの末広りの部分の具をおおうようにして内側に畳み込む。こうすると出来上がりがピシリとしまり、中味が端から外へはみ出すようなことはない。欲ばつて具を入れすぎるとバンチャンが破れ、逆に中味が少なすぎると出来上がりがグニャグニャになって恰好がつかない。

サイゴンにいた頃、形よくバンチャンが巻けるようになればベトナム化も一人前、といわれた。そのコツを習得するのに半年かかった。ピエールは私以上に手先が不器用な、ちらしい。包む前からエビやキュウリを掌からぼろぼろこぼしている。

「ほら、またこの白熊、本当にあんた何もできないのね」

罵りながら、エンが、それでもかいがいしく彼氏の分を巻いてやった。

「どう？ 食べられる？」

「ウイ、ママン、オイシイ、トテモ、オイシイ」

慣れない食べ物には憶病な彼も、今日は驚くほど食欲旺盛である。先ほどの話の後で、とくに私たちの意を迎えようと無理をしているようすはない。本当に熱帯の軽くさわやかな料理が気に入ったらしい。

「そうガツガツ食べるなよ。あたしが食べる暇がなくなっちゃうじゃないの。もう面倒みない」「いいとも。ぼくにだってできるさ、これぐらい」

厚い掌と太い指でしきりと格闘していたが、出来上がったのは小型ビールびんまがいの代物で

ある。パンチャンの皮が破れ、中味がテーブルにこぼれ落ちた。

ユンの嘲笑を浴びながら苦笑いして散乱物を片づけたビエールに、
「こんどは私が作ってあげるわ。はい、これを食べなさい」

妻がきれいに包んだ一本をさし出した。

「メルシー・ママ」

彼女は家でもユンと同様ビエールをこき使っている。硬質な優しさは示すが、食卓でこんな気づかいを見せるのは初めてだ。ベトナム人の風習では、年長者が若い者にサービスをするなどということはまずありえない。

「みろ、ビエール」

私は、冗談半分、話題を結婚の一件にもどした。

「ユンっていうのは飽きっぽい娘なんだぜ。おまけに頑固で気が強い。君、いったいこんなのと結婚したらどんな目に遭うと思ってるんだ」

「ぼくは、ユンの性格をよく知ってます」

「そりゃ、知ってるだろう。でもな、よく考えてみろ。バンコクで初めてユンに会ったとき、君は十四、五歳だったはずだ。これはオレのカンだけど、ユンは君にとって、生まれて初めての異性の友達だ」

相手は真面目な顔でうなずいた。

「要するに君は免疫性ゼロでこの馬鹿娘に会っちゃったんだ。それから一緒の家で暮らすように

なり兄妹きょうだいみたいな間柄になった」

「その通りです」

「違う。姉弟きょうだいだよ、なあ、ピエール。おい、どっちが親分シエフだ」

憤然とくちばしをはさんだ娘に、

「ユン—」

妻が一喝くわせた。返す刀で、

「何もあんたも馬鹿娘なんていう必要ありません」

と、私にまで累が及んだ。

「まあ、それはともかくとしてだな、問題は、君がこれまでうちの娘だけと付き合い、他の女の子を知らずにやってきたということなんだよ」

「そんなことは……」

「いや、オレが言いたいのは、ユンと同じ程度に親しく深く交際したガールフレンドがいない、ということだ。いるかい？」

「それはいません。ぼくには必要ない」

「まあ、そう決めたかかると。君も去年大学に入っただけだ。家庭以外でもかなり自由な時間が過ごせるようになった。これからよく目を開いて見給え。町にもキャンパスにも、ユンよりはるかに上等な娘こが山ほどいるはずだ」

ピエールは目を丸くして私を見つめた。ユンはそんなピエールをニヤニヤ眺めている。